

高齢社会とイベント

高齢者の生きがい活動とイベント機能の実証的研究

九州保健福祉大学 小坂善治郎

Zenjirou Kosaka

1. 研究の背景

1. わが国の高齢社会の特徴

平成9年版「老人保健福祉マップ数値表」(注1)によると、平成8年度のわが国の総人口は126,059,740人である。そのうち、65歳以上人口は19,339,290人で、わが国の平成8年度の高齢化率は15.3%である。この数値は、平成7年度に比較して、総人口で363,409人、65歳以上人口で732,065人の増加を示し、高齢化率は0.5ポイントの上昇をしている。

高齢化率14%以上になってわが国は、「高齢化社会」から「高齢社会」への急速なスピードで進んでいる(注2)。

欧米先進国においても高齢社会化は進行しているが、日本におけるその速度は著しく速い。例えばフランス人の高齢化率は1865年に7%になり、1979年に14%になった。実にこの間114年を要している。イギリス46年間、ドイツ42年間、デンマーク53年間である。アメリカとカナダは1945年に高齢化率7%となったが、まだ、14%になっていない。予想値として約70年後であろうと推計されている。わが国の高齢化率が7%になったのは1970年であり、それが1994年には14%となった。つまり、高齢社会となるのにわずか24年の歳月が過ぎたのみであった。このことがわが国のさまざまな社会活動を考える上で非常に多くの特徴と課題をもたらしている(注3)。

このように高齢化率は「高齢社会」現象下にあるかどうかの判断基準として用いられ、その高齢化率の公式の2つの構成要因がわが国の高齢社会の特徴を端的に示している。まず、高齢者の数が総人口に比して多くなれば当然のことながら高齢化率は高くなる。また分母である総人口の変化によっても高齢化率は変わってくる。

つまりわが国の「高齢社会」は、高齢者数の増加と「少子化」現象による総人口の構成の変化によって急速に実現した。実際、「長寿化」によって高齢者数は増加しつづけており、「少子化」現象もここに来て顕著になり、高齢者の増加に比較するとはるかに低い出生率を記録している。

したがってわが国の「高齢社会」を考える場合、ただ単に数値的な公式によるだけではその本質を正確に見極めることはできないといえる。

この前提に立ちつつ、本研究はわが国の長寿化現象を対象をしぼり、その中で、特に「高齢者の生きがいづくりの活動」についての研究をする。

2. わが国の長寿化現象

1997年の簡易生命表に(注4)よると、わが国の平均寿命(注5)は女性83.82歳・男性77.19歳となり、共に過去最高齢となった。わが国は世界一の長寿国となり(注6)長寿社会を形成している。

1997年10月1日現在のわが国の前期高齢者人口(65歳から75歳未満の人口)は、男性545万人と女性652万人の1,197万人、後期高齢者人口(75歳以上の人口)は男性273万人と女性506万人の779万人であり、65歳以上の高齢者の合計は1,976万人である。この時の総人口は1億2,617万人であるから、いわゆる高齢化率は15.7%である。前年(1996年10月1日)の高齢者総数は1,902万人(高齢化率15.1%)であるから、1年間の高齢者の増加数は74万人(男性33万人・女性41万人)である。増加率は3.9%と高い伸びを示している。

今後の高齢者人口の推移をみると、2000年には21,870千人、2005年には25,006千人、2010年には28,126千人、2015年には31,883千人と増加しつづける。

また1998年10月28日に国連が発表した世界人口推計では、2050年の100歳以上の人口比率は、日本が1,000人あたり2.6人で世界最大になるとしている。

わが国の人口年齢別構成は高齢者の比率がますます大きくなる特徴がある。このことは絶対的高齢者人口の増加を意味している社会構造を示している。長寿社会の進展は、これまで通用してきたあらゆる社会システムのパラダイムに大きな変化をもたらしている。

問題の所在

1. 高齢者の生きがいづくりの意義

長寿化現象はただ単に人口問題だけでなく、産業・福祉・教育・文化・生活など経済政策と社会政策としての課題である。

この視点に立つと、社会全体として大多数を占めるようになった高齢者の生活行動は、社会活動の形態をさまざまな面で動かすことになる。例えば高齢者の消費行動は産業社会に大きな影響をもたらすことになる。一方、高齢者の加齢は医療費の増大現象を生じ、1996年度の国民医療費の総額は28兆5,120億円(対前年比5.8%増)と過去最大を記録している。特に70歳以上(一部65歳以上の人を含む)の医療費は全体の32.6%(9兆2,898億円)で、前年度比9.5%増と大きな伸びを示し、国としての課題を生んでいる。

また、高齢者の個人的側面で、家族形態、就業と退職、生活費など多くの課題があり、それが多面的になっている。

これらは、世界的に例をみないわが国の高齢者研究が重要なテーマになっている。特に、その中であって極めて大きくクローズアップされてきた研究テーマに「高齢者の生きがいづくり」がある。「超・高齢時代」とした読売新聞のシリーズの中に「生きがい探し」=10万時間の余暇=の文章がある(注7)。「定年後に自分の自由になる時間は、とてつもなく長い。1日24時間のうち、睡眠や食事など生活に必要な10時間を引いた14時間が自由時間となるから、人生80年とすると、60歳定年からの20年間では計10万時間の余暇が生まれる。これは、四十年間の在職期間中に働いた総労働時間とほぼ等しい。この時間をどう過ごしたらいいか、生きがいとして何をすればいいか、わからないという人は少なくない」と記されている。

このような中であって、高齢者の「生きがいづくり」が極めて重要な社会的要請になってきていることが分かる。そして現実には、さまざまなかたちで、さまざまな活動が多様に展開されてきている(注8)。

しかし、高齢者の「生きがいづくりとその展開」に関する研究は、まだ十分とは言えない。ただ、ここで考えられることは、この高齢者の「生きがいづくりとその展開」にイベントが極めて深く関わり広く展開しているということである(注9)。

2. 生きがいづくりの「機会財」とイベント機能のあり方

金子勇は「新しい機会財」として「おそらく高齢者の健康文化の研究は、他の分野以上に、実証データに基づく現実分析とそれを基礎とした政策的展開を必要とするだろうが、現在の視点からの政策的展開は、「機会財」(opportunity goods)の新設・拡充をめぐる議論になると思われる。なぜなら、役割縮小・喪失しつつある高齢者が、再び社会と結びつく接着剤がこの機会財なのであるから。機会財とは新しい経験を用意し、そこに小さな役割を作り出す対人関係を軸とした活動場面を意味する。たとえば、公園や福祉センターで新しいグループ活動が創造されれば、それが機会財となり、そこからグループ内部の役割ができ、対人関係もまた新しくできる。その結果、「友達の友達はやはり友達」になる。」(注10)と述べている。

この考えにもとづくと、高齢者の生きがいづくりとその展開の活動は「新しい機会財」の創出といえる。そしてこの活動(機会財の創出と展開)にイベントが深く関わるのがイベントが有している機能からしてよく理解できる。

このようなことからして、「高齢者の生きがい活動とイベントの機能のあり方」が本研究の課題である。

研究の方法と手続き

高齢者研究は極めて広範囲になる。本研究では高齢者の生きがい活動に焦点を当てた。高齢者の生きがい活動もさまざまな要因によって生起される。そこで、研究のキーファクターとして「生きがい因子」を用いることとした。

高齢者の「生きがい」を構成する要素は極めて多面的である。また「生きがい」は個人の属性に係わる要素が多く、それ故に多様である。

しかし、高齢者の生きがい活動を生起させる共通項の「生きがい因子」がある。その因子の把握が本研究の第1のステップになる。研究方法として高齢者に対し「生きがいに対する意識」のアンケート調査結果がある。

そこから、高齢者の生きがい活動の生起している状況を、本研究では一点に定めることの根拠として使用する。

第2のステップとして、イベントの機能について確認をすることによって、高齢者の生きがいという新しい機会財づくりに有効である証明をする。

第3ステップとして、新たな高齢者の生きがいという機会財の創出と展開に「ネットワーク」の考え方が必要と思われる。「ネットワーク」の展開にイベントがどのように機能するか明確にする必要がある。

海老澤栄一は「単なる資源配分論や管理の諸原則を採用したとしても、組織同士の相互依存性や影響性あるいは複雑性を考慮した行動メカニズムを解明するのに十分でないことは明らかであろう。われわれはここに、組織間ネットワーク理論の構築とその体系化が情報ネットワークの影響メカニズムに視点をおいた組織間研究にとって重要であることを認識した。なぜならば、環境の不確実性軽減、組織間の良好なコミュニケーション、経営諸資源の共有・共用を通じた、より高度なパフォーマンス追求や、組織の“処理能力”の違いからくる経営諸資源の偏在などは、等しく“情報”の問題であり、それはすなわち情報の送り手と受け手との間の“ネットワーク”の問題だと考えられるからである。」(注11)と述べている。そのためには、「ネットワーク」のあり方を研究しておきたい。

第1から第3までのステップを考え方の理論構築とするならば、それが実際にどのように展開されているか、事例をもって確認をする必要がある。

高齢者の生きがい活動とイベントの機能の実証研究のケースとして、「幸紙(ゆきがみ)細工」の展開をとりあげる。

研究結果

1. 高齢者意識の因子分析による研究結果

財団法人長寿社開発センターの調査研究として、「高齢者の生きがい指導作成研究会」が実施した「中高年者の意識に関する調査」があり、多面的に分析した結果がある(注 12)。調査の分析はバリマックス回転を使った因子分析である(注 13)。

因子分析を行った結果、単なるアンケート調査の単純集計やクロス分析では観測することが不可能であった本質データを得ることができた。調査は、最終的には高齢者の生きがいの指標を探り出すことにあったが、そのために「自己の必要性」、「楽しいと感じるとき」、「生きがい」等の種々の質問項目を設定した。

この調査結果の全てを述べることは不可能であるので、総括として植本栄介の考察を引用する(注 14)。

高齢になるほど夫婦間の存在感が希薄となる

「自分がどのくらい必要とされているか」の因子分析結果から、「交流仲間」、「子孫」、「パートナー」(配偶者と職場の人)の3因子が導き出された。高齢者にとって、子どもや孫よりも、友人などの「交流仲間」との方が自己の必要性を感じていることは、子育てなどを卒業した人が多いことを考慮しても意外であった。

さらに、配偶者に関しては、職場の人と同様の因子となり、夫婦間の互いの存在感が薄いという感想を持った。特に、この夫婦間の存在感の希薄さは、高齢になるほど、また男性より女性の方が、強まる傾向にあることが分かった。

(表 1 参照)

表 1「自己の必要性」の因子分析結果(バリマックス回転後)

指 標	因 子 1	因 子 2	因 子 3
配偶者	0.009	0.162	0.721
子ども	0.246	0.681	0.328
孫	0.012	0.847	-0.171
親戚(兄弟姉妹を含む)	0.550	0.433	0.247
友人	0.840	0.001	0.120
近所の人	0.668	0.356	-0.062
同好会やサークルの仲間	0.758	0.012	0.003
職場の人	0.074	-0.114	0.748
固有値	2.094	1.535	1.296
寄与率	0.262	0.192	0.162
累積寄与率	0.262	0.454	0.616

出所:「高齢者生きがい指標作成研究」(委員長小坂善治郎)1998年3月 68頁

高齢者は積極的な余暇活動を志向する

「楽しいと感じるとき」の因子分析結果から、「積極的余暇活動」、「消極的余暇活動」、「家を守ること」、「家族と一緒にいないこと」の4因子が導き出された。余暇活動が上位であったのは予想されたことであったが、単なる余暇ではなく、より能動的な余暇活動をより選好するようである。これは、元気な高齢者が多くなっていることの一つの証明なのかもしれない。

高齢者が最も楽しいのは、「気の合う仲間と好きな余暇活動を行う」こと

「一緒にいると楽しく感じる人」の因子分析結果から、「交流仲間」、「子孫」、「パートナー」(配偶者と職場の人)、の3因子が導き出されたが、「楽しく感じる」との結果とも合わせて考察すると、高齢者にとって最も楽しいのは、気の合う仲間と好きな余暇活動を行うことであると推測される。

以上のように高齢者の生きがい活動は、明らかに積極的になっていることと同時に、極めて重要な社会的意義をもっていることが示された。

2. イベントの機能としての「経験共有の場」の研究

(1) コミュニケーションの過程と経験共有の場

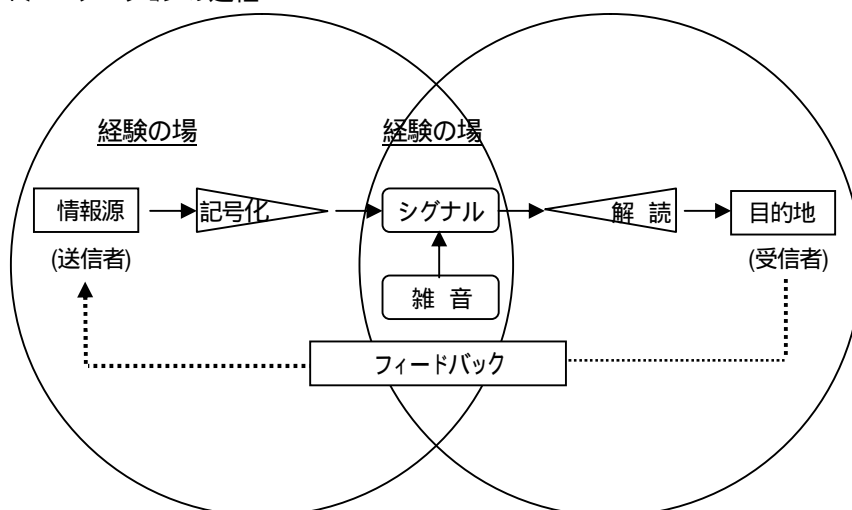
現代は、情報量の急速な増加の中で、自分にとっての意味を持った情報の選択が求められ、そして「情報の送り手と受け手が互いにその情報の意味を理解し、共有する関係を形成すること」(注 15)が大切になった。何かをコミュニケーションしようとするときには、その相手の人(受信者)と「共通の場」を作り上げる必要がある。この共通の場を一般に、両者の「経験の場(field of experience)」もしくは、「認知の場(cognitive field)」という(注 16)。

情報量が急速に増加している現代社会にとって、コミュニケーション手段は多様で複雑性を持っている。しかし、コミュニケーション過程に於いて、情報の発信者と受信者が同じフィールドに立つことができ、同じ時に、同じ機会において、同じ「経験の場」を持つことができたなら、そこに新しい関係、またより深い関係が構築されることになる(図 1 参照)。コミュニケーションの形成に於いて、「経験の場」の共有が大切になる。言いかえると「経験共有の場」である。

より強固なコミュニケーションの構築は「経験共有の場」をいかに作り上げるかということが大切になる。

この「経験共有の場」に多くの、しかも主要な機能を果たすのにイベントがある。イベントは「経験共有の場づくり」の有力な手段と言える。コミュニケーションの過程のモデルは図 1(注 17)である。

図 1 コミュニケーションの過程



出所: Redrawn From Wilbur Schramm, "How Communication Works," in *The Process and Effects of Mass Communication*, edited by Wilbur Schramm (Urbana Ill.: University of Illinois Press, 1955),より。

(2) 経験共有の場としてのイベントの機能

イベントはコミュニケーションメディアである。「情報を生み出すのは人間であり、人間と人間の接触であり、相互作用である」(注 19)

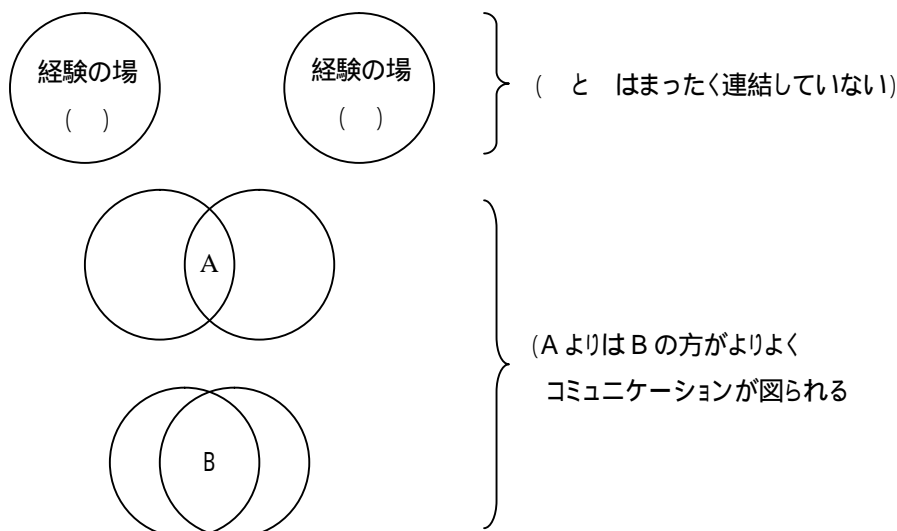
「片方から片方へ形式的情報を一方的に流すということではなく、互いに相手が発信する情報の意味を解釈しながら関係を形成する」(注 20)ことが必要不可欠なことと言える。

イベントは、このような双方向的コミュニケーション・システム構築の主要な、また重要な新しいパーソナル“メディア”であると言える。

その主な機能として、イベントはイベントに参加する人々にさまざまな「体感型情報」をつくり出すことができる(注 18)

なんらかの契機で、イベントに参加する人々は見たり、聞いたり、触れたり、といった行動でいろいろな個別的・直接的な情報を持つことになる。そこで新たな発見をし、感動をし、様々な情報を得ることができる。このようにイベントによってつくられる「経験共有の場」は、多様な「体感型情報」をつくり、強い関係を持つコミュニケーションをつくり出すことができる。

図 2 経験共有の場の概念図



出所:小坂善治郎共著「経営情報管理」白桃書房 1998年3月 190頁

イベントによってつくられる「経験共有の場」のつくり方とあり方は図2のように考えられる(注21)。

3. ネットワーク組織の基本構造の研究

高齢者の生きがい活動は、多様で積極的に展開される必要があり、「友達の友達はやはり友達」となることが大切で、そのために「ネットワーク」の考え方が基本的な課題として解明しておかなければならない。

海老澤栄一は「ネットワーク組織は、構成要素が部分的に独立し、かつ同時に部分的に依存しているような組織なので、利害については部分的にコンフリクトが生じ、かつ同時に部分的に協力関係が生ずる。したがって、共通に認識されている規範のなかでの集合的意思決定や集合的活動がネットワーク組織を維持するうえでの前提となる[M.ギルス; gils, 1984]。

ネットワーク組織では、公式職務構造のほかに構成メンバー間の非公式な接触や情報交換コミュニケーションも含まれる。ライン組織や職能別組織などにみられる伝統的組織に比べて、ネットワーク組織はそれが公式であれ非公式であれクラスター間を結合する主要変数すべてを分析の対象にした点に、特徴があると思われる。

かくしてネットワーク組織に参加するクラスターには、所属部署や職務、作業集団などに代表される。あらかじめ定められた計画型(prescribed)の属性と、連携感や連帯意識の比較的強い、非公式的で、しかもあらかじめ定めることのできない創発型(emergent)の属性とが併存していることになる[ティッチィ]。計画型ネットワーク組織は、目標や戦略を優先する“ 仕事の ” 結合が中心であるのに対して、創発型ネットワーク組織は、従事するメンバーの考え方や行動様式などを優先する“ 人的 ” 結合が中心になる。」(注 22)と述べている。そして「ネットワーク組織の基本構造」について次のように分析し論述している。基本モデルの概念であるので、正確性を考え、海老澤栄一の論述をそのまま引用記述する(注 23)。

ネットワーク組織の構造は、「ネットワークの全体構造」、「ネットワーク内のクラスタリング」、「ネットワーク内の個人」という3つのレベルで分析できる[ティッチィ=フォンブラン]。

ネットワークの全体構造

以下のような要素がネットワーク全体の構造を規定する。

- ・ サイズ: ネットワークに参加する人の数
- ・ 密度: ネットワークに参加する組織メンバーの比率
- ・ 結合度: ネットワークメンバーの相互に結合している程度

- ・ 視度: ネットワークメンバーが相互に識別できる程度
- ・ 開放度: ネットワーク同士の結合度
- ・ 安定度: 生存の可能性の期間
- ・ 集中度: 影響力のあるクラスターの数

ネットワーク内のクラスタリング

ネットワーク内には特定の個人関係や結びつきが他の個人間よりも強固であることがよくみうけられる。このような結合度の強い個人間の関係をとくにクラスターという。このクラスターの考え方は、結合度の強い組織間関係にも援用できる。計画型ネットワークでは、職務遂行に依拠した公式な作業集団や部門がクラスターを形成する。一方、創発型ネットワークでは、連帯(coalition)や非公式的なクリーク(clique)がクラスターを形成する[E.ロジャース; Rogers, 1983]

ネットワーク内のレイゾンとしてのクラスターには、したがって、計画型と創発型という2つの表裏一体の性格があり、ともに、

- ・ あるクラスターから他のクラスターへの連結の程度を示す開放度
- ・ あるクラスターと他のクラスターとの重複を示す重複度
- ・ あるクラスターと他のクラスターとの結合の程度を示す結合度が問題になる。

ネットワーク内の個人

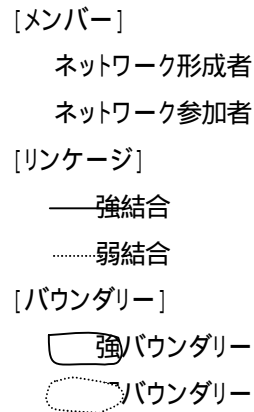
ネットワーク内の個人は、社会的、相対的な地位や位置づけの違いによって、次に示すような5つのタイプが識別できる。

- ・ スター(star): 特定の個人が他の数多くの参加者と関連性をもつ。
- ・ レイゾン(liaison): 特定の個人がいかなるクラスターも所属することなく、複数のクラスターと連結を保つ。
- ・ ブリッジ(bridge): 特定の個人が複数のクラスターのメンバーとして機能する。リンキングピンともいえる。
- ・ ゲートキーパー(gate keeper): 特定の個人があるクラスターから他のクラスターへの流れをコントロールする。
- ・ 孤立: 特定の個人が他のメンバーと接触をもたない状態。

以上の3つのレベルは、ネットワーク組織の構造を、ネットワーク全体のマクロレベルからネットワーク内のミクロの個人レベルまでみたものである。ここでネットワーク組織の基本構造を素描しておきたい。

ネットワーク組織の基本構造は、ネットワークのメンバーとそのメンバーを結ぶリンケージ、さらにそれらを同一の規範で包み込むバウンダリーの3つの基本要素からなる。

図3 ネットワークシステムの基本構造



出所:海老澤栄一「組織進化論」白桃書房 1992年 108頁

以上のように海老澤栄一は、ネットワークシステムの基本構造について分析している(図3)。この考え方は、本研究にとって極めて有意義である。高齢者の生きがい活動も、新しい事柄がどこかで生まれ、そして共鳴する人々がネットワークを形成して、一つの広がり(バウンダリー)をつくる展開になっていると理解できる。

そして、このネットワークを形成する過程に於いてイベントが大きく機能していることが十分に理解できる。

バウンダリーを形成する過程でも、バウンダリーと他のバウンダリーを結合する過程でも、イベントの機能が大切になる。ここにイベントの機能の一つのあり方がある。

4. 実証研究「幸紙(ゆきがみ)細工の展開」

高齢者の新しい機会財としての「幸紙細工」は、イベントが有効に機能して、島根県大田市から秋田県大館市につながり、さらに広がりのある展開をしている。このケースは、「人と人との出会いとつながり」によるネットワーク組織の構造を持っている。そしてつながりの要点(又は基点)にはイベントが適確に機能している。

このケースの全てを本文では論述できないので、本研究の目的を果たすことのできる範囲で実証研究の対象としたい。

事例の概略

島根県大田市の高齢者に広がりを見せていた。チラシやカレンダー・ポスター等のリサイクルを兼ねた「折紙細工」が、平成10年5月に秋田県大館樹海ドームの多目的室で行われた「リサイクル折紙講習会」のイベントに多数の参加者が集まり、これを契機にこの折紙細工が大きな広がりをしている。

この折紙細工は、一枚の小さな紙片を折って一つのピースをつくる。そのピースをいくつも組み合わせて鶴とか花びんなどをつくり上げるものである。何千個とか何万個のピースを使うこともあり、一人の作業より数人のグループで作業することに適している。

リサイクルと造型を兼ねたもので、指先を多く使うことから高齢者の生きがい活動に適している。

(幸紙細工の創作プロセス「つる」のケース)

幸紙細工の展開経過

島根県における展開

1. 大田市大代町のバウンダリーの形成

島根県の高齢化率(平成8年度数値)は22.7%でわが国で一番高い。その中で大田市は26.1%と極めて高い。高齢者の多い地域である。

大田市大代町は山間地で人口は674人(平成7年10月1日)で高齢者は308人(高齢化率45.7%である。この大代町に大場キクエ(79歳)さんが、折紙細工を保存していた。大代町の近くに温泉があり、多くの高齢者が湯治する一方で、大場さんからこの細工を習得していた。この場で同市久手町の「六寿会」や「フリーママさんの会」の人々も大場さんから習得することになった。

2. 弥山荘での「作品展示会」

平成9年7月26日、入湯も兼ねて川本町老人福祉施設弥山荘(湯谷温泉)に於いて、高齢者の「作品展示会」(イベント)を実施した。久手町からは岩崎敏子(68歳)さんを中心に数名が参加した。大場さんの技術は熟達したもので、参加者に対して極めて高い関心と呼んだ。

3. 大田市久手町のバウンダリーの形成

このイベントを契機に、久手町に岩崎さんを中心として「リサイクル折紙細工」の輪が広がった。「フリーママさんの会」「老人クラブ六寿会」の活動は、完全なネットワーク組織の構造体となって、久手町に大きなバウンダリーを形成した。

4. 高齢者の生きがいづくりコーディネーター研修会

平成 10 年 2 月 26 日・27 日に松江市に於いて、(財)しまね長寿社会振興財団主催の高齢者コーディネーター研修会(イベント)があり、県内の高齢者活動のリーダーが集合した。この会場に於いて、久手町のみなさんのグループが折紙細工の作品づくりのケースをまとめて発表した。県内からの参加者も大きな興味を持った。この場のインストラクターが筆者(小坂)であった。

秋田県における展開

1. 大館樹海ドームでの講習会

秋田県の大館市に平成 9 年 7 月オープンした世界最大級木造ドームは住民参加による「ソフトプランナー会議」に記念イベント等の企画と運営を任せている。

財団法人大館市文教振興事業団は平成 10 年 8 月に実施する記念イベント「誕生祭 2」の検討を同会議とともにしていた。

その中心のイベントは、ギネスにチャレンジする「世界一の折鶴」であった。検討委員会は、大鶴と同時にコミュニティー活動につながる種目を求めていた。筆者は島根県の折紙細工のケースを紹介した。委員会は大きな興味を持ち、「誕生祭 2」のコンセプト(地域間交流)に合致する事から、研究することに決定した。

平成 10 年 5 月 23 日(土)、島根県より岩崎敏子さんを講師に招き、ドーム多目的室において講習会を「リサイクル折紙講習会」と題して開催した。50 名程度の予定で 1 市 3 町の老人クラブやボランティア組織、および広く新聞等での参加を呼びかけを行ったところ、予想を大きく上回る 150 名の申込があり、2 部屋に分かれて講習を行った。

講習会の反響が大きく、再度の講習会開催の要望・問い合わせがドーム事務局にあいついたため、2 回目の講習会を 6 月 28 日(日)に開催した。講師は 5 月の講習会で作り方を会得した大館市有浦町内婦人部のグループ「はまなす会(高橋末子代表)」が 9 名の集団でつとめた。参加者 100 名。

2. 幸紙(ゆきがみ)細工と名称を決定

広がり始めた折紙細工は、「リサイクル折紙」から独自な名称が欲しいとの声が大きくなった。新聞等を通じて紙細工の名称募集を行った。その結果、桂城短期大学生桜田直子さんの「幸紙(ゆきがみ)細工」を採用することとし、大場さん、岩崎さんの了解を得て使用することとなった。「幸」は夭折の夭(=早死に)と(=逆)を合わせた漢字で、「長生き=しあわせ」を意味することから、高齢者の生きがい活動に効果のあるこの紙細工の名称としてふさわしいとして決定された。

3. 大館樹海ドーム「誕生祭 2」での講習会と作品展示

平成 10 年 8 月 2 日のドームオープン 1 年目の記念イベントの一つとして大館樹海ドームアリーナの外周において「はまなす会・たんぼぼの会(ボランティアの会)」の皆さんが世話役になって創作指導をした。さらに、これまでに完成した作品を持ち寄ってもらい展示も行った。来場者 7,000 人の大きな関心呼んだ。この際にはアリーナの中心部では、世界一の折鶴に挑戦して見事に完成した(同年 12 月にギネスより認定を受けた)。

4. さらに広域に広がる展開

たんぼぼの会(会長:阿部恵子さん、会員数 24 名)

民間のボランティア団体としてヘルパー(半数位資格を持っている)などの活動を行っている。毎週水曜日、大館市内のボランティアの店において希望者に幸紙細工を教えている。毎回5~6人の希望者があり、平成10年中に100人を超えている。来訪者は大館市内を中心に比内町、田代町、能代市などから。

花岡婦人会(会長:沢口キヨエさん)

沢口さんと山内禮さんの2名が講習会に参加。2名を中心に10年5月から12まで花岡の公民館、集会所において婦人会の10年度活動として教室を開催。公民館だよりに募集チラシを挿入して募集した。公民館や銀行などに展示を行った。

布谷チネ子さん

布谷さんは2回の講習会へ参加、仕事で訪れる比内町大葛で時間が空くため、その間を利用して高齢者センターにおいて教室を開いた。教室の参加者がそれぞれ個人的に教えたりして地域に広まっている。

10年11月の比内町産業祭に、12名の幸紙細工の出展があった。

さらに、さまざまなかたちで広がりが続いている。

考察

島根県の高齢者によって、保存されていた「折紙細工」は、高齢者の生きがい活動の機会財として活用されている。

さらに秋田県大館市を中心にかなりの大きさの広がりをしつつけている。大館市に於いては「幸紙細工」と名称を決定する動きもあった。

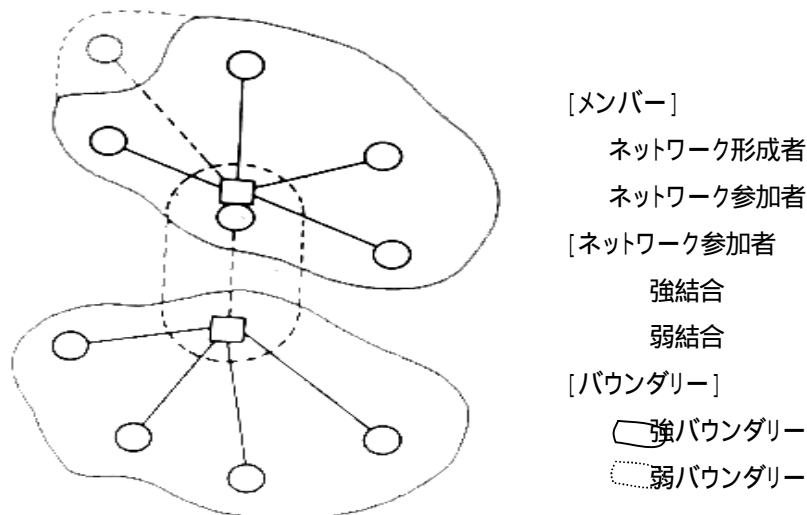
このケースから多くの事項が研究事項としてつかめる。まず、高齢社会に於ける高齢者の生きがいづくりに機会財としての考えが必要であること。さらに高齢者は仲間とのつき合いを求めている。今まで全く見知らぬ人々ともチャンスがあれば、何時でも、誰とでも知り合うことができる。そして、そのような機会を多様に多面的に求めている。

出会いの機会は、共通のテーマと共通の場で一つの経験を伴いに行うことが最も強いつながりになっている。つまり、イベントの機能である「経験共有の場」が絶対的に必要となっている。

このようにしてイベントによって結ばれたつながりは、また新たなイベントの場によって、さらに広いつながりになって展開していることがよく分かる。

海老澤栄一は「組織間ネットワークシステムは、プロトタイプとしてのネットワークシステムが社会システムのなかで外延化したもので、組織が1つのメンバーとして位置づけられ、それが複数の他の独立した組織メンバーと結合し、相互影響活動や相互依存活動を営む。その概念モデルはおおよそ図4のように描かれる。」(注24)と述べている。

図4 組織間ネットワークシステム概念モデル



出所:海老澤栄一著「組織進化論」白桃書房1992年111頁

このモデルから「幸紙細工」のケースによって検証すると、島根県に於いては、源(スター)を大場さんとすれば、リエイゾン又はブリッジ役は岩崎さんである。この人々はさまざまなイベントの機会を持ってネットワークを組んでいる。

秋田県へのつなぎのゲートキーパーは筆者であったと云えよう。

秋田県に於いては、高橋さんを代表とした「はまなす会」や阿部さんを代表とする「タンポポの会」などがブリッジ役をつとめているといえよう。特に大切なことは、さまざまな人々が登場するが、全てが「イベントの場の機会」を使って、「同一の経験を共有する」ことから強いつながりが生まれている。

さらに特記すべきことは、これら高齢者の活動がさまざまなメディア(新聞、テレビ、ラジオ等)に「パブリシティ」として取り上げられていることである。パブリシティの示す役割に三重野卓は「実際に、財(物財、サービス)を中心として『生活の質』について分析する場合、表層的な分析に陥るということもできる(このところ『自己充足』という価値も注目されている。)また、欲求がすでに顕在化していることもあるが、パブリシティ活動は潜在的欲求を刺激することによりその顕在化に貢献することという点に目的があり、その生活様式を前提とした社会的価値(価値の創造という戦略も

含む)に適合するように行われる。」(注25)と述べている。

イベントは多くのパブリシティの「シーズ」ともなり得ていて、大きな効果を生んでいる。このようにイベントは高齢者の生きがいづくりと活動の合意と連帯感を生み出す参加的意志(empowerment)を高めることに貢献しているといえる。

イベントは高齢者の生きがい活動に大きく機能していることになり、ますます進展する高齢社会にイベントは大きな役割を持っている。

今後の課題

高齢者の生きがい活動は、ますます多様になり、増大する。それは高齢者が増加するという数的な事実もあるが、ライフスタイルの変化に伴った高齢者の生活観の変化という側面からも考えられる。さらに高齢者の生きがい活動は個人または家族という単位を越えて、コミュニケーション活動、同好的サークル活動というように、人と人とのつながりによる形態を多くとるようになる。このように高齢者の生きがい活動は、人と人との直接的な接触する場を基点として展開することに多くの特徴を持っている。このような特徴を可能にする場はイベントの機能を必要としている。

高齢者の生きがい活動が多様に、積極的に推進するためには、イベントの適確な展開方策のあり方をさらに研究することが必要になる。

イベントはますます進展する高齢社会にとって、有効な社会的機会財を生起させることにつながる極めて重要な手段といえる。イベントの機能と構築方策の研究は高齢社会(少子化現象を含めて)によって、さまざまな観点から多面的に検討することが必要であると考えられる。

(注1) 平成10年11月に(財)長寿社会開発センターより発表されたもの。

(注2) 高齢社会の定義について石畑良太郎・牧野富夫編著「社会政策」ミネルヴァ書房、1995年6月、第6章柳澤敏勝稿163頁から引用する。国際連合が1956年に出版した「人口の高齢化とその社会経済的意味」でなされた定義に従うのが一般的である。(United Nations, The Aging of Population and Its Economic and Social Implication, 1956, 岡崎陽一「日本人口の高齢化」三浦・岡崎編「高齢化社会への道」中央法規出版、1982年、38頁)。そこにおいては、総人口に対して65歳以上の高齢者の占める割合が7%以上の人口を「高齢化した人口(aged population)」「老化した人口」と訳するのが一般的と定義している。この定義に従えば、65歳以上の高齢者が総人口の7%以上を占める社会を「高齢化社会」とよぶことができる。しかしながら、同書にも指摘されているように、7%という数字が確かな根拠をもたない以上、一つの慣例的な基準としてとらえておくのが妥当である。川口によれば、今日では65歳以上の高齢者(老年人口とよぶ)が総人口の7~14%を占める段階を「高齢化(しつつある)人口」(aging population)、14%を超えた段階を「高齢(化した)人口」(aged population)とよぶのが一般的である。

(注3) 小坂善治郎著「高齢社会福祉と地域計画」中央法規出版1998年5月25頁

(注4) 生命表は、5年ごとに実施される国勢調査を元にまとめられるものを完全生命表、その間に作成されるものを簡易生命表とされている。

(注5) 平均寿命は生命表によって各年齢の人が平均であつて何年生きられるを示す平均余命が算出される。零歳児の平均寿命として使われる。

(注6) わが国の1947年の平均寿命は男性50.60歳・女性53.96歳である。1996年の平均寿命は男性77.01歳・女性83.59歳で、50年の間の伸びは他国に比し最大である。わが国が世界一の長寿国と呼ばれるようになったのは、女性が1985年から、男性は1996年からである。

(注7) 1998年10月31日読売新聞「超高齢時代」131回

(注8) 政策的にも、平成10年度の国民生活白書は12月4日に発表された。その主な内容は「生涯現役の環境づくりの提言」としている。この白書は平成10年で42回目となるが、高齢社会を真正面から取り上げ、特に「高齢者の生きがいづくり」に言及している。「生涯現役」というキーワードは、一面では暗いイメージで語られがちな高齢社会を明るい面にしようと強調している。(読売新聞1998年12月4日を参照)

(注9) 平成7年度「全国明るい長寿社会づくり推進機構活動事例集」1996年3月
この事例集によると47事例のうち39事例がイベント事例になっている。

- (注 10) 金子勇「高齢社会何がどう変わるか」講談社 167 頁
- (注 11) 海老澤栄一著「組織進化論」白桃書房 1992 年 10 月 100 頁
- (注 12) 「高齢者生きがい指標作成研究会」(委員長小坂善治郎)1997 年から 1998 年にかけて調査研究をした。1998 年 3 月にその研究結果を発表した。
- (注 13) バリマック回転とは、因子の解釈を容易にするために座標軸を回転させること。つまり、各因子が特定の変数とのみ高い相関を示し、他の変数とは無相関に近くなるように単純化することである。
因子分析は、人間の知能を測定する方法として、20 世紀初頭に心理学から生まれた手法であり、人々の意識や態度分析や、消費者のライフスタイルや商品に対する選考分析などのマーケティング調査、等の幅広い分野で頻繁に利用されている。
参考文献として：
「多変量解析」柳井晴夫、高根芳雄 朝倉書店
「マーケティング・サイエンス」片平秀貴 東京大学出版会
「人文・社会科学の統計学」東京大学教養部統計学教室
「多変量解析とその応用」フラーリー/リードウェル 現代数学社
「統計・分析手法とデータの読み方」朝野紀夫 日刊工業
「入門多変量解析の実際」朝野照彦 講談社サイエンティフィック
- (注 14) 植本栄介論文「実践経営学会・第 41 回」
全国大会・報告要旨集」1998 年 10 月 18 日 85～87 頁
- (注 15) 今井賢一・金子郁容著「ネットワーク組織論」岩波書店 1988 年 86・87 頁
- (注 16) 奥本勝彦著「新マーケティング基礎講座」日本マンパワー 1988 年 9～11 頁
- (注 17) 出所は注 16 と同じ
- (注 18) 小坂善治郎著「イベント戦略の実際」日経文庫 1991 年 2 月 28～34 頁
- (注 19) 今井賢一著「情報ネットワーク社会」岩波書店 1984 年 34 頁
- (注 20) 注 19 と同じ
- (注 21) 小坂善治郎共著「経営情報管理」(山内昭他編著)白桃書房 1998 年 3 月 190 頁
- (注 22) 海老澤栄一著「組織進化論」白桃書房 1992 年 10 月 106 頁
- (注 23) 同上書(注 22)106～108 頁
- (注 24) 同上書(注 22) 111 頁
- (注 25) 三重野卓著「生活の質(Quality of life)の意味」白桃書房 1992 年 5 月 42・43 頁